

10年前の東日本大震災のときのことである。岩手県釜石市では、小・中学校併せて3000名の子どもたちのほとんどが巨大津波の被害を免れた。子どもたちは地震発生と共に津波が来るかもしれないと察知し、避難所まで一目散に駆けた。避難所に到達しても心配で、さらに高台に上って事なきを得た。

こうした子どもたちの見事な行動は「釜石の奇跡」と呼ばれ、なぜこんな行動を取れたのか、全国の関心を集めた。

釜石の学校では、数年前から津波学習が徹底して行われていた。ただ避難訓練をするだけではなく、あらゆる教科の中に津波学習を取り入れていた。例えば、算数の時間では、津波の速度を計算させる。そうすると、津波はジェット機並みの速さだと分かり、子どもたちは驚く。

1960年に南米沖で地震が発生し、津波が起きたことがある。地球の裏側からそんなに速く津波が来るはずはない、とっていたところ、翌日早々には三陸沖に押し寄せ被害をもたらした。そういう実例を算数の授業の一環として教える。

また、理科であれば津波の仕組みを学習する。国語や社会であれば、東北地方に昔から伝承された津波に対する様々な教えを調査して学習するなど、それぞれの教科で連携する形で津波学習の教育が行われていた。その結果が子どもたちの見事な、しかも自発的な避難行動につながった。

学校では、国語、社会、数学、理科、英語などのように、当たり前前に教科というものがある。いかにも絶対的な存在として君臨しているかのようである。だが、この複雑な世界を読み解くには、他から切り離れた単独の教科だけでは到底、力が及ばない。教科間の協同作業がどうしても必要になる。釜石の例は、文理融合型の学習活動を実現した例だと言える。

高校のカリキュラム編成を見ると、多くの高校では、入学すると1年も経たないうちに、文系か理系かを選択させる。まだ高校の学習体験も少ないのに決めさせるのだから、ミスマッチも度々起こる。

大学の経済学部へ進んだ生徒がいる。経済学部では1年次から専門科目が導入されており、数学の確率・統計の基礎知識が必要となる。ところが、その生徒は、高校の2年次から私立文系コースで、数学の授業は僅かしかなく、確率・統計は学習していなかった。

これは、文系コースならば、確率・統計などの科目は必要ないだろうという一種の偏見がもたらした悲劇である。こうしたことは、決して少なくはない。目の前には、文系理系に分けたほうが大学進学率を上げるには効果的だという現実がある。

早稲田大学で最難関とも言われる政治経済学部の受験科目に数学I・Aが必須となり、話題となった。これから、少しずつ変わっていくのかもしれないが、そのスピードは遅い。

だいぶ昔のことになるが、私は高校時代に世界史を選択した。これからは世界のことを知らなくてはいけないという考えを抱き、期待に胸を膨らませて授業に臨んだ。ところが、さっぱりわからない。そこで、独学で日本史を勉強した。すると、世界と日本の関係が見えてきて、一気に理解が進んだ。世界史と日本史の教科書を両方準備し、双方行き来しながら授業を進めてくれると、私でも理解できたのかもしれない。世界の中の日本を知ることができただろう。

小学校にも中学校にも、そして高等学校にも、教科や科目というものがある。それは制度的には絶対である。しかし、実際的には、絶対でもなくすべてでもない。高校では、新しく歴史総合という科目が登場した。次は、文理融合の新しい教科の出番なのかもしれない。将来的には、大学にも文学部物理学科などというものができるともかもしれない。

釜石の奇跡は、実は教育による奇跡だったのである。学校には、教科や科目ではない、見えないカリキュラムのようなものがあり、それが重要であることを釜石の奇跡は教えてくれる。